

広 報

第 2 号



第 58 回生委員（後列）役員（前列）

3/7(金) 新会員 142 名を迎える

卒業式前日、第 58 回生資格授与式が挙行された。引き続き同窓会入会式に移り、新会員 142 名へ齋藤良子会長からお祝いの言葉があった。回生委員 6 名に委嘱状が手渡され、会員全員に入会記念品などが贈られた。

草創期の木造校舎解体される 2014(平成 26) 年 5 月



旧短大校舎（6 回生アルバムから）

木造校舎の履歴（一部法人資料を参考）

S29・1 新築～S43・3	1～13 回生の学舎
S45・1 増築～S50・3	主に中学生の教室
S56 ～H26・3	幼小部門・実習室 園長・校長室・職員室など
H26・5	解体（築年齢 60 年）

『のびる』が縁で、4月21日木造校舎見学

「短大校舎が解体されるんですって!」。3月末シスター今泉から『のびる』をもらった卒業生数人から報せがあった。「壊される前に中を見られないかしら?」の声、声。

「解体準備中・4月21日なら」と、学院長柴田先生から小学校長川田先生の許可を取り付けていただき、非公式見学の運びとなった。

当日小雨降る中、シスター中島、シスター今泉、渡辺二沙子先生や1～12回生10数名が参加された。増築や改装が幾度か加えられ様変わりしたもの、1階北もと洗濯室から南へ、2階の教室、裁縫室へと回った。色あせた床や各部屋の窓ガラスやドアノブは当時のまま。「隅々まで床はピカピカ、黒板は最先端の湾曲型、ここは、事務室、隣は学長室、先生方の部屋・・・」と声高な皆の会話に、案内の小学校教頭武藤先生は興味深く耳を傾けられた。

学長レジナ様、マイロー様のお顔が目についた。ハイレベル（故氏家先生の表現）の教育を受けたこと、糊の効いたブラウス、年中制服着用、中ヒールの靴音立てて廊下を歩いたことなど、誇らしく、懐かしく、乙女の時代に戻れたひと時だった。

短大校舎が、中高、さらに幼小部門へとお下がり、学院建物中、最長60年間大切に活用され「感謝と、お疲れさま」の言葉を贈ります。

同窓会室に戻って一人ひとり自己紹介……。シスター中島は、いつになく嬉しそうなお声で話されていたのが印象的だった。

(写真は右掲載)



第117号
桜の聖母学院
幼稚園・小学校

木造校舎との別れ

桜の聖母学院前理事長・学院長 シスター 今泉ヒナ子



「小学校の木造校舎が解体される」というニュースを聞いて、「ああ、寂しい」「なつかしい」と思う方が学院関係のあらゆるところに、大勢おられることでしょう。それは、小学校が使う前に、時期を異にして桜の聖母のあらゆる部門がいたからです。

ところで、カトリック学校が他の私立学校と違う点の一つに、普通の学校法人がまず大学を創立し、次いで高校、中学…と生み出していくのに対し、カトリック学校が年齢の若い部門から順に作っていく、という一般的傾向が挙げられます。

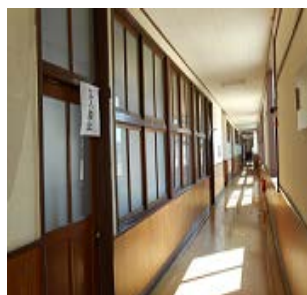
桜の聖母もそうで、まず戦後に小学校を新設し、戦前に設立したまま休園だった幼稚園も再開。その子どもたちが卒業するのを受け取る中学校、そしてその三年後に高校ができました。昭和二十九年、第一回生が高三になっていました。それで、短期大学が用意されたのです。すでに小さな学院ながらも、小中高のどの学年にも元気な子どもたちがいて、楽しく勉強していました。

私はまだ、コングレガシオン・ド・ノートルダムに入会する、大学新卒の「シスターの卵」でした。当時の理事長・学長（米国人シスターセント・レジナマリー）の通訳のような仕事をいただいていたので、先生方がどのような夢と熱意で、新しい短大をはじめ、総合的なこの学院を育てようとしておられたかを、感じ取ることができました。最大の難関は、(当時の名称で)文部省の厳しい視察を経て、短期大学の設置認可を受けることでした。新しい先生方が採用され、設備や備品が揃えられたのも、この年です。

小さかったけれども、「新校舎」はピカピカでした。当時としては結構珍しい教育らしくて、新聞記者が来ては写真を取り、取材していました。

昭和三十年に第一回生が入学し、開学式が行われました。

あれから六十年。ピカピカの校舎は、中高生も使いましたが、最後に小学校が本当に丁寧に使ってくださいました。木造の校舎が、こんなに長生きしてくれました。懐かしい校舎よ、ありがとう、ありがとう！



中島喜多子先生ご帰天

コングレガシオン・ド・ノートルダム修道会会員

シスター中島のこと

シスター中島喜多子先生が、去る五月二二日、静かに天国に帰られました。八九歳。そのうち六三年余を、修道者として過ごされたわけです。桜の聖母学院中高をはじめ、短大で長年働かれた中島先生は、学務部長や学長などの任務も果たされ、修道院では修道院長を務められました。ただし、愛情も深く、シスターと親交のあった同僚や学生は、温かい、よい思い出をたくさん持っています。理数系に強く、今の若い人たちの表現を使えばシスター中島は「リケ女」の典型。その話し方には無駄がなく、論理は明快で客観的でした。私のような八割がた無駄ばかりのしゃべり方は、彼女には謎だったことでしょう。それでもシスター中島と私は、結構仲良く生活し、働きました。お互い、神に生きる身分だったためでしょうか。私は、まことに貴重な先輩に恵まれました。シスター中島は、目まぐるしい転勤命令もなく、修道生活の全期間を福島で過ごし、落ちついた人生を送られました。身のまわりはいつも整然としていました。手先が器用で、退職後も生涯学習センターで手芸を教え、帰天直前まで、彼女らしい生き方を生き抜かれました。今はどうぞお休み下さい！

シスター今泉ヒナ子

=あとがき=

初夏の候。木造校舎の跡地には、小学校校舎、体育館が来春に誕生します。

企画・編集：広報委員会